

2020年2月2日 礼拝説教要旨

詩編講解説教1 「いかに幸いなことか」

詩編1：1～6、マタイ5：3～11

詩編はヘブライ語で「テヒリーム」、ギリシア語で「プサルモイ」と言いますが、単純に「歌」という意味の言葉です。150編の歌が集められた、いわば歌集です。ユダヤ人はシナゴグに集まって礼拝をしますが、その中でこの詩編を歌ってきました。やがてキリスト教においても、グレゴリアン聖歌などの典礼歌として用いられ、宗教改革以後もカルヴァンが詩篇歌を編集し礼拝で用いるようになりました。そのように長い歴史の中で親しまれ、常に信仰者によって歌い続けられてきたのが詩編です。そして教会の歴史の中でも、アウグスティヌスもルターもカルヴァンも皆詩編に親しみこの注解を書き、教会でこの詩編から御言葉を語り続けてきたのです。そういう意味でわたしたちが詩編を読むことは、そういう歴史の中を生きてきた神の民と同じ体験をすることです。

カルヴァンは注解書の中でこう述べています。「教会に対する神の特別な寛仁(心広いこと)と、そのすべてのわざに対する、これ以上明白で荘厳な讚美は、この書を他にしては見いだされない。この書におけるほど救いについて多くが語られ、われわれに対する神の摂理と、父としての慰めのあかしと体験が豊かにまた真実にほめたたえられている書物は存在しない。一言にして、この書における以上に完全にいかに神をほめたたえるかが教えられ、またこれ以上にいきいきとわれわれを敬虔のこのような修練へと励ましてくれる書物は存在しない」そういう御言葉に触れることができることは本当に幸いなことです。

さて今日は第1編ですが、多くの注解書はこの第1編を詩編の序文のようなものだと言います。いわば詩編全体の土台となる信仰がここにあると申し上げてよいと思います。それがこの冒頭の言葉です。「いかに幸いなことか」原文では「幸いだ、この人は」という言葉です。アシュレー(幸い)という言葉が詩編の最初の言葉なのです。何が本当の幸せなのか。皆さんもそういう問いを持つでしょう。世の中には様々な幸福論が溢れていますが、多くの人々は幸せな老後や、幸せな結婚、幸せな家族の形を思い浮かべるかもしれません。健康で、何不自由なく生活することができる。それが幸せだと。でも考えてみてください。いい時はいいでしょう。でもそれが崩れる時が来る。思い描いていた老後ではなくなる。理想の家族の形ではなくなる。そういう時が来ます。その時に、わたしたちは自分はまだ幸せではない。幸せの枠から外れてしまったと考えるのでしょうか。そうなるとうわたしたちが思い描く幸せというのは、実に不確かなもの、不安定なものであり、そこで一喜一憂しているのがわたしたちの現実ということになります。それは本当の幸せというものなのでしょうか。そういう儂いものを幸せと呼ぶのでしょうか。それは4節にあるような風に吹き飛ばされるもみ殻のようなものではないのでしょうか。もしそういうものを幸せと考えているならば、わたしたちの人生もまた非常に不確かな、不安定なものになってしまうのではないかと思います。

でも詩編はまず宣言します。「主の教えを愛し、その教えを昼も夜も口ずさむ人」(2節) すごい人こそ幸いなのだ。ここで改めて気づかされたことがあります。この「教え」と訳された言葉は「トーラー」という言葉です。トーラーと言いますと、少し旧約聖書を学んだ人なら、この言葉が律法を意味する言葉であることを思い出します。実際、旧約聖書の最初の5巻モーセ五書のことをトーラーと言うのです。ですからトーラーと言いますと、堅苦しい規則のような

印象を持つ人も多い。でも本来はそうではない。それは「教え」「諭す」ものであり、ちょうどよちよち歩きの赤ちゃんの手を引いて歩くようなこと、手招きをして自分のところに引き寄せるようなことです。赤ちゃんはフラフラしてしまいますし、どこに行くのかわからない。でも手を引く存在があることで安心なのです。だから詩編にはこういう言葉があります。「主の律法は完全で、魂を生き返らせ、主の定めは真実で、無知な人に知恵を与える。主の命令はまっすぐで、心に喜びを与え、主の戒めは清らかで、目に光を与える。主への畏れは清く、いつまでも続き、主の裁きはまことで、ことごとく正しい。金にまさり、多くの純金にまさって望ましく、蜜よりも、蜂の巣の滴りよりも甘い（19：8～11）これも律法について教えていますが「蜜よりも、蜂の巣の滴りよりも甘い」とあります。甘いものが好きな方は多いでしょう。でもそのように心地よいものとして御言葉を食べるというのです。

実際にそのように日々御言葉に親しんだのがユダヤ人でした。「昼も夜も口ずさむ」というところを頭に置いていてください。申命記6：4～9（引用）ここにも「寝ているときも起きているときも」とあります。要するに四六時中ということです。イスラエルに行きました時に、このトーラーを頭や腕につける道具をお土産で買って来たことを思い出します。そうやって肌身離さず御言葉を身につける。それはそれだけ御言葉を自分と同化させる。自分の中に染み込ませるようにするのです。

ここにすでに感覚の違いがあるのですが、わたしたちは御言葉を読むとか学ぶという感覚でしょう。でもユダヤ人は違う。自分の体の中へ入れる。だから暗唱する。先ほど「甘い」という表現がありましたが、御言葉を食べるという感覚なのです。13歳の成人バルミツパという儀式がありますが、そこではトーラーを抱えて歩く。そして暗記できたかどうかをテストします。それはこの神さまの言葉を食べ、その人の中に入り、魂に触れ、そして歩みを整えてくださるという信仰があるからです。

そこで覚えやすいのは歌なのです。皆さんも好きな歌があるでしょう。それを時々口ずさむことがないでしょうか。詩編は歌集だという話をしましたが、それこそユダヤ人にとって詩編は読むものではなく歌うものなのです。わたしたちが好きな歌を口ずさむように、ユダヤ人は詩編を口ずさむのです。そうやって体の中に染み込ませた。命の糧にした。申命記に「御言葉はあなたのごく近くにあり、あなたの口と心にあるのだから、それを行うことができる」（30：14）それが幸いなのです。御言葉と一つになる。それは神さまと一つになることです。

でもユダヤ人はそのように暗記したり、手につけたり頭につけたりして自分から御言葉に近くあろうとしましたが、わたしたちはむしろ神さまの方から近づいてくださったことを心にとめたいのです。それがイエス・キリストです。「言は肉となってわたしたちの間に宿られた」（ヨハネ1：14）とあります。キリストによって神さまの御言葉は限りなくわたしたちに近づきます。そしてその極みとしてご自身の命を十字架で献げてくださいました。そしてよみがえりの命で満たしてくださった。だからどんな困難の時もそこで主の憐れみと恵みを信じるのです。そこに本当の幸いがあります。